

こ が のぶあき  
古賀 伸明

連合・事務局長

## 人は何のために

新年明けましておめでとうございます。

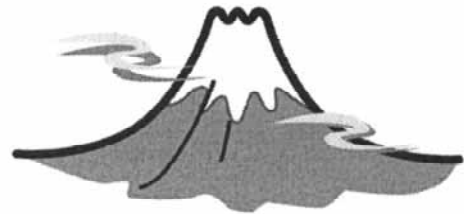
ご家族お揃いで健やかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

冒頭から私事で恐縮ですが、昨年10月に開催されました連合第9回定期大会において、連合事務局長に選出され、あっという間に3ヶ月が経過しました。グローバル化の激化、IT社会の進展、人口減少・少子高齢社会、雇用構造の多様化、そして地球環境保護や循環型社会への要請の高まりなどの大きな環境変化は、多くの課題を浮き彫りにしています。かつて経験したことのないこの急激な波は、私たちの働き方や暮らし方、そして生き方に様々な影響を及ぼしています。今重要なのは、変化や変革は決して他人事ではなく、むしろ労働組合や私たち一人ひとりに従来の発想からの脱却や意識改革を迫っていることを、改めて自覚することだと思えます。一方では、このような時代だからこそ、組織や個人の新たな可能性を探し出す絶好の機会であるはずで、この大きな歴史的な転換期の中で、新たな任務は身に余る重責ではありますが、労働運動の新たなステージにむけて果敢に挑戦していきたいと思えますので、ぜひ、皆さまのご指導・ご支援を心よりお願い申し上げます。

さて、昨年は、戦後60年、政治でいえば55年体制から50年・半世紀、国際的には日韓条約から40年、プラザ合意から20年、そして、自然災

害ということからは阪神淡路大震災から10年...と、あらゆる分野で節目の年でした。また、郵政民営化問題の参議院での否決と9月11日の総選挙において、民主党の惨敗、衆議院の3分の2を占める巨大与党が誕生したことも、私たちにとって大きな出来事でした。加えて、年末には、凶悪犯罪の多発や耐震強度偽装問題など、これからの日本の将来を暗澹とさせられるような事件が起きました。

昨年(2005年)の世相を象徴する「今年の漢字」には、「愛」が決まりましたが、昨年で11回目を迎える公募で、心温まる言葉が選ばれるのは初めてのことだそうです。ちなみに、小泉改革の郵政改革を反映して、2位は「改」、3位は「郵」でした。米国のハリケーンなど各地で続発した自然災害の被災者救済など地球規模の「愛」、紀宮さまと黒田慶樹さんのご結婚などの一方で、広島、栃木、京都などで相次いだ児童殺害事件など「愛」が足りない事件が続発した世相が反映したとも言われています。「世界に愛があふれて欲しいと思って」などの意見も寄せられたとのこと。清水の舞台を背景に、縦約1.5メートル、横約1.3メートルの和紙に筆で「愛」の字を一気に揮毫し、本堂に奉納した森清範貫首は、「これほどいい字ははじめてだろう。現実には愛でいっぱいとは言えない世の中を、愛で染めたいという人々の気持ちが反映されたのでは。相手の喜び、悲しみが伝わってく



るのが愛。観音様の慈悲にも通じる。心を込めて書かせていただいた」と話したことが報道されました。

戦後60年、日本は経済的な発展を遂げ、諸先輩のご努力により一定の物質的豊かさを享受できる社会を実現したというのに、何故か「将来に希望がもてない」という不安と「何かを変えなければならない」という苛立ちにも似たものが交錯しています。そして、一概には言えませんが、この急激な経済成長の代償ともいえるような数々の現象が生じてきています。前述したような様々な出来事や事件は、罪の意識や規範意識の欠如ともいえる社会的に大きな問題となってきましたし、日本はまさに社会基盤そのものが揺らぐようなことが散見される事態となっているといっても過言ではないでしょう。

昨年11月に他界した経営学者ピータ・ドラッカーは、もうずいぶん前「今後展開し続ける重要な現象」として、「過去40年間は経済が重要な問題であったが、今後25年間は社会または社会問題が最重要課題となる。特に日本において顕著になる」とメッセージを発信しましたが、まさに、その通りになっています。日本と日本人はこれからどう生きればいいのか、どの方向に向かえばいいのか、国家、社会、個人のあり方が問われる、今、そんな時代にあるのではないのかとつくづく考えざるを得ません。今日の

日本の閉塞感に覆われた状況は、政策の良し悪しもさることながら、精神の衰退、意欲の減退、志の劣化という、いわば一種の社会現象ではないでしょうか。

私たちは、しばらく続いた、いや続いているのかもしれませんが、平和で安全だと信じている時代の中で、「人が生きるといえることとはどういうことなのか?」「人が働くことの意味とは?」そして、「人が社会や組織の中でどんな役割と責任を果たさなければならないのか?」などを考える機会の少ない社会を創ってきたのかもしれませんが、「人は何のためにこの世に生まれ、存在しているのか?」という根源的なことを、もう一度じっくりと考える必要があるのではと思われて仕方ありません。もちろん、労働運動も解決すべき多くの課題に直面していますが、一方では、このような根源的な価値観に対して思いをはせる「時」と「空間」を持ちたいものです。

四百年前、ベニスの衰退期を生きた歴史家ジョバンニ・ボテロは「偉大な国家を滅ぼすものは、決して外面的な要因ではない。それは何よりも人間の心のなか、そしてその反映たる社会の風潮によって滅びるものである」と、書き残しています。